「わかる」ということ——二冊の書物から

『子どもを殺す子どもたち』
『【賢治】の心理学　献身という病理』

友定　啓子

『子どもを殺す子どもたち』（デービット・ジェームズ・スミス著、北野一世訳、翔泳社、一九九七年）、この刺激的なタイトルの書物の原題は、“THE SLEEP OF REASON : The James Bulger Case”という。

この本はまさに、去年のあの神戸の事件が起こったときに出版された。まだ、それが中学生による犯行だとわかっていない時期だった。あの事件で初めて、私たちは子どもたちとの距離を自覚せざるを得なかった。しかしその後、あれほどの騒ぎにもかかわらず、私たちの「なぜ？」という疑問に、何一つ納得のいく答えが得られないままに、事件は目の前から忽然と消えてしまった。事件から何も学べないまま、飲み込めない異物のよ

うに胸の奥に残されたままになっている。ところが、それを合図に、まるで堰を切ったかのように、少年による凶悪犯罪が、続発してきた。連日のように報道される、大人の理解の域を越えた少年犯罪を、どう受けとめていいのかわからず、異物はますます大きくなるばかりである。

この書物は、一九九三年にイギリスで起こった、十歳の少年二人が、二歳の幼児をつれだし、乱暴して殺した上、線路の上に遺体を置き、さらに轢断したという、イギリス中いや世界中を震撼させた事件の記録である。日本でも、この二人の少年が被害者の幼児を連れていくビデオ映像が報道されたので、記憶に残っておられる方がいるだろう。

四百ページをゆうに越えるこの書物は、一ジャーナリストが知り得た事実のみで構成されている。普通、このような事件をルポルタージュとして取り上げるときは、犯行の動機、犯人の感情などを、さまざまな事実から推し量って、解釈が与えられる。私たちも読むときは、その解釈の「説得力」に応じて、それを受け入れる。その解釈が合理的で不変的で、単純なものほど受け入れやすいし、少々複雑でも、筋が通っていれば私たちは納得する。

しかし、この書物には、解釈も推量も表だった主張もない。解説すらない。それでも、この周到かつ膨大な事実の合流から見えてくるものがある。私は、解釈も結論も与えられなかったけれど、何かがわかったという気になった。自分がいかに、子どもというものを安易にとらえていたかということを、思い知ったような気がした。たかだか十歳の子どもの犯行である、いずれ本人の口から事実が明らかになるだろう、という甘い期待はみごとにうち砕かれた。少年のうちのひとりは、最後まで犯行を認めなかったのである。客観的な証拠がそろっているにもかかわらず、警察をはじめ、並みいる大人達は、彼を「落とせなかっ

た」。その少年には、大人に対する、一片の依存も信頼も認められなかった。十歳の子どもでも、自分を守るためなら、事実を絶対に言わないことができるし、どんなうそでも言える。なまじ論理的な思考をしないので、それだけ自由にふるまえるのかもしれない。この本を読んでも、少年達の犯行の理由も気持ちもわからない。しかし、ていねいな事実の積み重ねによって、少年達は何をどのようにしたか、事件を巡って人々が何をしたかがよくわかる。それだけで何かが見えてくる。

犯人が誰であるかを私たちは知りたいわけではない。何をどのようにしたのかがわかれば、私たちはそこから考えることや学ぶことがたくさんある。声高に厳罰や制裁を叫ぶだけの感情的方策に走らないですむ。そんなことをわからせてくれた本である。それにしても「事実」を語ることにこれほどのエネルギーがいるということ、何かをわかることのたいへんさをあらためて感じた、村上春樹の『アンダーグラウンド』にも似ている。

一昨年は宮沢賢治の生誕百年にあたり、たくさんの賢治本が書店に並んだ。私も、かの有名な「雨ニモ負ケズ」をはじめ、多くの童話や詩を通じて、賢治のことはある程度知った気持ちになっていた。私が以前から不思議だったことは、どうして妹をあんなに愛したのだろうかということ、美しいのにどことなく悲壮感が漂うのはなぜだろうかということだった。その謎が、この本のサブ

タイトル「献身という病理」を見た瞬間に、解けたような気がした（矢幡洋著、彩流社、一九九六年）。ここ二、三年、ブームの観を呈した「嗜癖」「共依存」ということばを思い出した。私自身、何をするのにも「役に立つ（願わくば、人様の）」ことをつい基準にしてしまうところがある。何かを人に頼むのでも、頼む分だけ自分が相手の役に立たないとと思ってしまうところがある。献身というほど、自己を投げ出してはいないので、私の場合はかなり俗っぽい。たぶん、病気じゃないと思う。

この著者はこの前に『「星の王子さま」の心理学』（大和書房、一九九五年）を書いている。そこでは「中心気質者」という概念を導き出している。それも悪くないが、さすがこちらは相手が日本人だけあって、フィット感が違う。多少の理論を利用して説明をしているのだが、それよりもたんねんな事実の積み重ね、賢治の文章の検証に基づいて、述べる著者の解釈の方が、よっぽど説得力がある。賢治は人からものを「受け取れない」人だったのだ。美しく見える「献身」「自己犠牲」という態度は、「自分は人に愛されない」という痛ましい自己規定の上におかれたものであった。こういわれると、偉大に見える人間の弱さや悲しさが見えてきて、いとおしくもあり、それとともに自分も励まされるような気がする。

私は読みながら、「心理学」とは、こういうものをいうのではないかと思った。心理学が「科学性」や「客観性」にこだわった「真理」を追求している限りは、間接性から逃れられない。徹底して、目の前の一人を理解しようとすることから出てくる真実の方が、結果的に人々をずっと力強く支えるのではないかと思った。『「星の王子さま」の心理学』もおすすめである。この著者の魅力のひとつは自分を除外しないことである。

（山口大学）